



施設だより

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602

9月の休館日：7月・14月
・24月・28月

- 9月 9月18日(金) 19:00～ 金亀亭第2回落語ライブ
自由 柳家花緑独演会「花緑ごのみ」
- 10月 10月7日(水) 19:00～
音楽と人形 一人形師 谷ひろしが生んだ人形と
3人の表現者によるハーモニー
出演：えだまつ こずえ、松井 恵子、尾鷲 武志
自由 2,000円
- 10月 10月25日(日) 18:30～ 劇団四季ミュージカル
指定 「アンデルセン」
- 10月 10月27日(火) 19:00～
金亀亭第3回狂言・落語コラボレーション
自由 狂言のふりゅう&落語の風流
- 11月 11月5日(木) 19:00～
指定 名曲の花束 ブルガリア弦楽室内合奏団
ソフィア・ゾリスデン&ミラ・ゲオルギエヴァ
- 11月 11月11日(水) 19:00～
自由 「トミー・キャンベル 河合代介 岡安芳明
トリオ」レコーディング・ライブ
彦根オリジナル・ナンバー発表コンサート
- 11月 11月22日(日) 11:45～
NHKのど自慢 公開録画
ゲスト：森 進一、原田 悠里
※詳しくは、広報ひこね9月15日号でお知らせします
- 12月 12月12日(土) 19:00～ 金亀亭第4回落語ライブ
自由 4,000円 [9月17日(木)発売開始]
立川志の輔独演会
- 12月 12月20日(日) 14:00～
自由 1,500円 [9月20日(日)発売開始]
第12回 ひこね市民手づくり「第九」演奏会
- 12月 12月24日(木) 14:00～
指定 3,000円 [10月4日(日)発売開始]
外山啓介クリスマス・ピアノリサイタル

ひこね市民大学講座 自由 全5回

- 第3講 9月5日(土) 14:00～
童門冬二さん(作家)
- 第4講 9月27日(日) 14:00～
枝廣淳子さん(環境ジャーナリスト)
- 第5講 10月10日(土) 14:00～
金子勝さん(慶應義塾大学経済学部教授)

託児サービス・臨時バスの運行については、公演ごとに異なります。詳しいことは、お問い合わせください

チケットのお申し込み、お問い合わせは
チケットセンター ☎27-5200 (9:00～19:00)

彦根城博物館

9月の休館日はありません。
※9月1日(火)～同3日(木)および
28日(月)～同30日(水)は展示替えのため、
展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30～17:00 (入館は16:30まで)

9月4日(金)～同28日(月)

「井伊家伝来の馬具」

大名家にとって必須の道具であった鞍や鐙などの馬具。将軍家からの拝領品や蒔絵を施した逸品など、井伊家伝来の馬具を紹介します。



▲金梨地枝橋蒔絵鞍・鐙

ギャラリートーク

「井伊家伝来の馬具」

9月5日(土) 14:00～15:00

※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂にお集まりください。

観覧料が必要ですよ

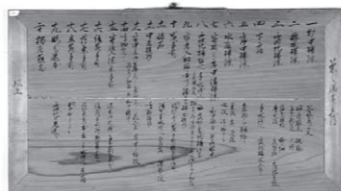
直弼のころ

幕末の大老、井伊直弼(1815～1860)は、国政を担う政治家として知られる一方、茶の湯や国学、禅、居合などにひたむきに取り組む、文化人としての面をあわせ持っていました。このコーナーでは、直弼ゆかりのさまざまな作品を集め、その人となりを紹介します。

9月2日(水)～同27日(日)

茶湯亭主心得扁額

茶会を催す際の亭主の動きと心得について書き出した扁額。直弼の茶会の様子を伝えます。



第43回 彦根城能 10/17(土) 16:00～ 彦根城博物館能舞台

演目・出演

金春流 能 「忠度」	本田 光洋 ほか
大蔵流 狂言 「茶壺」	善竹 忠一郎 ほか
金春流 能 「羽衣」	金春 安明 ほか

入場料 A席5,500円、B席5,000円(全席指定)

発売日時 9月17日(木)発売開始

※初日は、9:00(窓口)、10:00(電話) 販売開始

販売窓口・問い合わせ先

彦根城博物館 ☎22-6100、FAX22-6520



▲熊毛泥障



▲黒漆塗 葵紋菊蒔絵鞍・鐙

武家を指す「弓馬の家」という言葉が示すように、武士の身分は、戦いにおいて馬に乗って弓を射る技術を職能として成り立っていました。そのため、馬は、武士の存在の根幹を成す重要なものです。
室町時代には、武家の年中行事において、諸大名が太刀と馬とを将軍に献上することが例となり、その慣習は江戸時代にも受け継がれました。また、時に応じて将軍から名馬を拝領することもありました。
彦根藩主井伊家に伝来した馬具の中には、徳川将軍家からの拝領品が含まれ、馬具一式で飾られた馬を拝領したと推定されるものもあります。ここで紹介するのは、寛政9年(1797)3月1日、将軍家世子徳川家慶(のちの12代将軍)の元服式で加冠役をつとめた井伊家11代直中が、馬とともに拝領した品です。このとき拝領したのは、鞍を含む馬具一式、つまり馬具でした。

馬具の構成の中心となるのは、馬の背に乗せて人が坐る台となる鞍、鞍と鐙は、金と銀との高時絵の技法を用いて、同じ意匠で統一がはかられています。鞍の前輪と後輪、鐙に大輪の菊をあらわし、両輪の中央に葵紋を配しており、華やぎの中にも落ち着きを感じさせる優品です。不老長寿の象徴とされる菊は、武運長久を祈り、武具や馬具の意匠に採用

と、人が足を踏みかける鐙です。ほかにどのような道具があったのかを、当時の目録をもとにたどってみましょう。
馬を操縦するための手綱、手綱をつける轡鞍の上に敷く馬鞍の下に敷いて馬の背や両脇を保護する切付、鞍と鐙をつなぐ力革、切付の下に垂らして泥の飛びはねによる衣服の汚れを防ぐ泥障、馬腹から廻して鞍全体を結びつける腹帯、馬の胸から腹を覆う馬衣、馬の頭、胸、尻にかける組紐として使う押掛、馬の口や鼻につけて手に持つ口取綱、馬の鼻づらにかける鼻革、馬を洗ったり、馬屋につないでおくときなどに用いる簡単なつくりの洗轡など、実に多くの種類の道具が確認できます。これらのうち、現在、約半数が伝存しています。

写真の作品は、テーマ展「井伊家伝来の馬具」(9月4日(金)～28日(月)・会期中無休)で展示します。

これら質の高い馬具の装いによって、名馬の雄姿はより際立ったことでしょう。馬具は、単なる馬に乗るための実用の道具の域を超え、権威の象徴という役を担うとともに、武家の美意識をあらわす格好の対象と成り得たのです。

彦根城博物館学芸員 高木文恵

名馬を飾る皆具

とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ



第157回